



Title	時間表現の意味構造とその分析
Author(s)	刀祢, 雅彦
Citation	Osaka Literary Review. 1985, 24, p. 24-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25539
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

時間表現の意味構造とその分析

刀 栃 雅 彦

1. 文化による違いはあるとしても、時間というものが人間の認識において普遍的なものであるならば、ある言語がどのような構造によって時間指示の機能をはたしているかは興味深い問題である。しかし、そのような議論をすすめるには、ある程度の客觀性をもって言語表現と時間的事象を結びつけるメタ言語が必要となる。一方には時制の機能を時間と切りはなしてあつかう立場もあるが、本稿ではそのようなメタ言語によるさまざまな言語現象の記述と説明を試み、その可能性を追求する。

2. 時制の意味構造を複数個の時点の前後関係によって体系的に図式化しようとする試みは、Reichenbach (1947) において示された、いわゆる SRE 理論（または Reichenbachian Tense Logic, RTL）にさかのばる。以後、彼の方法は、おそらくその体系性のゆえに、多くの学者によって用いられてきたが、一見、整然としたこの体系は一方で不明瞭な概念や記述力の限界をも伴っている。まず、この理論の構成概念、特に言及の時点 R という術語の再検討からはじめることにする。

Reichenbach (1947) では三つの時点 S (point of speech), R (point of reference), E (point of the event) を直線的に配列した図式を次のように各時制に対応させている。¹⁾ (未来については後であつかう。)

- (1) (a) Simple past : E, R—S
- (b) Past perfect : E—R—S
- (c) Simple present : S, R, E

(d) Present perfect : E—S, R

[‘X, Y’ は X と Y が同時であることを示し,
‘X—Y’ は X が Y に先行することを示す。]

三つの時点のうち, S と E についてはある程度物理的に考えることもできるが, R という時点は何を意味するのだろうか。彼がこの概念を用いるに至った動機を考えてみよう。

まず第一に彼は R を用いて「単純時制」と「完了時制」の違いを説明しようとしている。彼によれば時間限定詞 (time determination, 以下 TD) は R を指示するのであり、単独の E は指示しない。²⁾ たしかにこう考えると次のような文の文法性に一応の説明を与えられる。

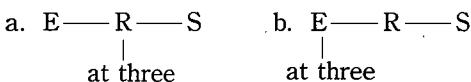
(2) He went there yesterday /* now.

(3) He has gone there now /* yesterday.

(1) の図式をみると、単純過去と現在完了における S と E の関係は同じだが、前者では R が E とともに過去に、後者では S とともに現在におかれている。(2)において now が、(3) では yesterday が共起できないのは、それらが指示すべき R がないからだというわけである。しかし、このような説明の一般性は疑わしい。たとえば、Reichenbach もみとめているように、統語的には英語の現在完了と同じ構造を持つドイツ語のそれには(3)のような制限はない。また英語でも過去完了では TD が一義的に R を指すとは限らない。Hornstein (1977) は(4)の文のあいまい性を(4')のように表わしている。³⁾

(4) John had left at three.

(4') leave leave



a. は「John は 3 時にはもう出ていた。」, b. は「4 時に私が行くと, John は 3 時に出たあとだった。」というような場合である。b. の解釈では E にも

TD が結びつくことをみとめざるをえない。

R という概念のあいまいさは、次のような未来の文のあつかいにも表わされている。

(5) Now I shall go.

(6) I shall go tomorrow.

Reichenbach は「(5) は S, R——E という意味で、これは本来の未来時制の意味だが、(6) は S——R, E と解釈せざるをえず、これは本来の意味からの逸脱である。しかし、どちらのタイプが一般的とも言えないでの、どちらか片方を正しい解釈とすることはできない。」と言っているが、この苦しい説明は TD が R のみにつくという仮説の当然の帰結であろう。

上の説明はまた、彼が図式化しようとしている「時制の意味」のレベルについて示唆を与えてくれる。彼が解釈という言葉を用いていることや、TD の違いによって R の位置を動かしていることから、彼は文脈から切りはなされた時制の意味だけではなく、むしろ特定の文脈におかれた時制形から解釈の過程（たとえば TD との結びつけ方）を経て派生する時間指示機能とでもいうべきものをもいっしょに論じているのだということがわかる。つまり、R とは、S や E とは異なり、解釈の過程に属する流動的で多分に心理的な概念である。そのような時点を、各時制に対応する基本的な意味の図式に最初から書き入れておく必要はないのではないか。

次のような文も R に関する問題を提起する。

(7) Did you turn off the gas?

(8) Did you ever see such a beautiful girl?

Reichenbach は未来時制には先の二つの図式をみとめているが、過去時制には一義的に E, R——S をあてている。たしかに(7)のような文では、過去の特定時 R における事象の生起を指示していると思われるが、(8) の文には必ずしもそのような特定時への言及はないだろう。このように R が命題内容にも左右されることを考えると、やはり、それを時制に帰するの

には無理がある。

Rとともに問題になるのは、ひとつの図式に用いられる時点の数である。Reichenbachは、とりあげた時制のすべてをSREの三点の配列によって表現している。それは魅力的ではあるが、単純時制の図式としては繁雑すぎる。TDはRにのみ結びつくという説が疑わしい以上、たとえば単純現在にSと独立にRを与える十分な理由はみいだせない。⁴⁾一方、表現が少し複雑になると、三点では分析できないいうらみがある。たとえば、次のような文をあつかえない。

(9) Now we will have no money at the end of the month.⁵⁾

なぜなら、Reichenbachに従うとどうしても二つのTDに対して別々のRが必要になるからである。問題は時点を単にふやすだけでは解決しない。たとえば、いささか作為的な文だが、(10)の意味をPriorのように(10')と分析したとして、一見して時点間の関係がわかるだろうか。⁶⁾

(10) I shall have been going to see John.

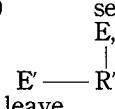
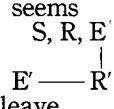
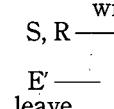
(10') S — R₁ — E — R₂

問題はどうやら時点間の関係を一本の直線上に表わそうとすることにあるようだ。(10)の動詞句はあきらかに複数個のレベルの違う前後関係の複合による意味構造を持っていると思われる。この点に関してNerbonne(1983)の分析は示唆に富んでいる。⁷⁾彼は時制に関してRTLの記法を受け継いでいるが、(11), (12), (13)のような文を下のようにとらえる。

(11) He seemed to have left.

(12) He seems to have left.

(13) He will seem to have left.

(11') seemed E, R — S	(12') seems S, R, E	(13') will seem S, R — E
		
E — R' leave	E — R' leave	E — R' leave

上の図式が示すように、彼は直示的な、つまり S を基準とする時制のレベルと、非直示的な、つまり S とは直接結びつかない完了不定詞(E'—R')のレベルを区別し、その積み重ねで意味構造を表現している。二つのレベルのたての結びつきについて、彼は「主動詞の E が補文の R として用いられる。」と述べている。このやり方は時点間の関係をうまくとらえていると言えよう。とくに S と E' の関係が直線的にではなく、間接的に決まることがよくわかる。たとえば(13')では $S < E$, $E = R'$, $E' < R'$ より、E' は S との前後関係においては制限をうけないことがわかる。Reichenbach が時制としてあつかったものの中にも上のような分析をされるべき構造を持つものがあるのではないだろうか。

3. 以上のような RTL の問題点を考慮しながら、より一般性が高く、統語的構造と意味構造をうまく結びつけられるような記述法を考えてみたい。

まず基本的な三時制を次のようにあらわす。

- (14) a. Past : E — S
 b. Present : S, E
 c. Future : S — E

これらは文脈から切りはなされても確定的な S と E の関係のみをしめたものである。c. を英語の未来時制に対応させることには問題があるが、これについてはあとでふれる。

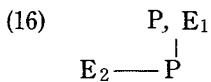
以上の三つは最初から S という直示的基準点を持つはんちゅうである。これに対し、その基本的意味として直示的でない単位である三つの「アスペクト」を下に定義する。

- (15) a. Anterior : E — P
 b. Neutral : P, E
 c. Posterior : P — E

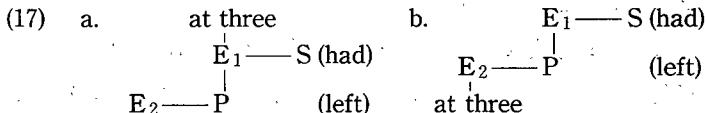
本来のアスペクトという概念は非常に複雑な意味構造をふくむが、以下
単にアスペクトという場合、上のような意味関係のみを指す。

上の図式において、PはEを定位させる中心点pivotを意味する。RTLではSとRは独立した概念だったが、(14)(15)におけるSとPはともにEを位置づけるという共通の機能を持ち、ただSは既に=発話時という値を持つ、いわば定数であり、Pはそのような値を持たぬ、いわば自由変数であるという点においてのみ異なる。したがって(15)におけるEが直示的な値を得るためには、なんらかの手段によってPに直示的な値が与えられねばならない。

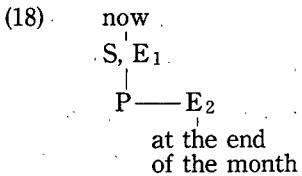
4. では(14)と(15)の組みあわせによって実際の構造を表わしてみよう。たとえば, to have + V-en は次のようになる。



RTLの単一のEしか持たない図式と異なり、haveにも独立したEを与えている点に注意してほしい。(この枠組では動詞的要素にはすべて事象性を考え、Eを持つ可能性ありとする) 前出(4)の文の構造は、これを過去におくことで得られる。



(17) は have の事象時 E₁ が S によって直示的過去に定位され、結果として E₂ も直示的な値を得たことを示す。また、先に論じられた TD が指示する時点のあいまい性は、ここではそれが二つの E のどちらに結ばれるかという形で表わされる。同様に will にも E を与えるなら、前出 (9) の構造は次のように描けるだろう。



これは Now I want to go tomorrow. の構造とまったく同じである。

(17)(18) の構造および(2)の文（構造は E——S）が now と共にしない事実を総合すると、RTL の「TD が結びつくには R が必要である」という規則は「TD が結びつくには E が必要である」と書きなおすことができる。

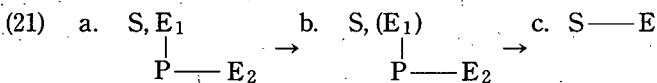
(18) では will の E によって TD(now) の共起を説明したが、逆にこの TD によって will の事象性が意識化されるのかもしれない。というのは will の事象意識はすでにかなり希薄であり、単なる時制オペレータと考えられる場合も多いからである。次のような文の will には、E を未来時に定位すること以外の事象的内容といったものは考えにくい。

(19) Tomorrow will be Sunday.

(20) The sun will rise at six thirty tomorrow.

will の場合、統語的にはまだ不定詞から独立しているが、ラテン系言語のように未来の助動詞であったものがすでに形態的にも独立を失って動詞の活用語尾のようになっている例もある。そうなると、やはり、それに独立の E を考えることはむずかしくなる。

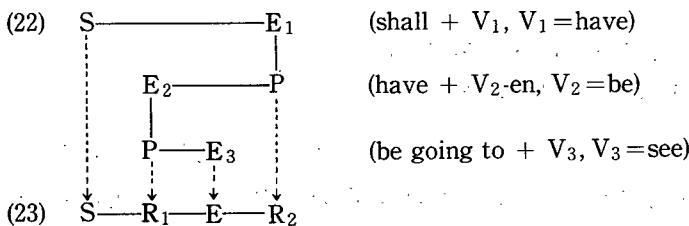
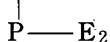
上のように E を複数個持つ複合的時間表現が単純時制的に変化していく不可逆的な通時的過程を想定すると、その意味構造の変化は次のようにとらえられるだろう。



- a. は want to + V のように二つの動詞が完全に事象としての時間的独立性を持っている状態 b. はその片方が助動詞化、つまり事象としての意識

の希薄化をおこしている中間的段階、そしてc.はそれが完全に消滅した状態を示す。will + V もVのEを未来に定位する機能のみを考えるときはc.のように図式化してもよいだろう。

では次に、前出(10)の文の構造を考えてみよう。この文の動詞句には動詞要素が五つあるが、簡略化して shall + V は S—E, be going to + V は E₁ と考える。



この図式から、E₂はS, E₃はE₁から自由であり、E₃の変域には構造的には制限がないことがわかる。しかし、これはあくまでも語用論的条件による制約を考慮しない段階である。たとえば、この文の発話者がすでに John に会った、あるいは今現に会っている、という場合にはこのような文が発話されることはないだろうから E₃ ≤ S の解釈は排除される。そののちにもなおいくつかの可能な読みが残るだろう。上の(23)は(22)の構造が先にふれた SRE による単線式の図式(10')に写影される様子を示したものである。これであきらかなように、(22)の構造から派生する解釈のひとつが(23)なのであって、他にも S-R₁-R₂-E, R₁-S-E-R₂, S, R₁-R₂, E なども不可能ではないだろう。とにかく、この文の統語構造に由来する時間表現の構造のみを記述するのであれば、(22)の図式で十分なのである。(23)のような表現をこの文の唯一の意味として与えるのは好ましくないだろう。

以上、(14) (15) に示された図式を用いて複合的な時間表現を考察した。この枠組みはまた、直示的はんちゅうである時制と非直示的はんちゅうである（(15)で定義した限りでの）アスペクトの間に観察される相互転換現象をもよく説明することができる。なぜなら先に述べた S と P の定義によれば、P は変数であるから発話時という値を与えられればその指示機能は S と等しくなりうるし、逆に S がなんらかの条件の下に既存の値である発話時を奪われればそれは P と同じものになりうるからである。たとえば、次のような口語・方言的表現の意味と解釈を考えてみよう。

- (24) Jonathan working for MSU.
- (25) Daddy gone to work.

これらの文はいずれも時制、つまり S を担うべき助動詞を欠いている。たとえば (24) では、それは was, is, will be のどれである可能性もある。しかし、これらの文を無条件に提示されれば、たいていの人は発話時を基準として——つまり (24) では is が、(25) では has がある場合と同じように——解釈するだろう。これは次のような語用論的解釈原則がはたらくからだと考えられる。

(26) 発話時優先の原則

非直示的時点 P をその意味構造に持つ表現を時間的に解釈する際、文脈・推論等によって P の値が決められない場合、P = 発話時として解釈せよ。

この原則によって、P は S と同じ指示機能を得ることになる。これは言語の直示性指向に関わるかなり普遍的原則であると考えられる。⁸⁾ 直示的な時制を持たないといわれる、いわゆる無時制言語においてはもちろん、時制を持つ言語においても、この原則に従うと思われる表現は多いようである。Givón (1982) はクレオールの発展の過程では、非直示的な Anterior のアスペクトを持つ要素が直示的過去を指示するマーカーに変化する傾向があると述べているが、⁹⁾ これも (26) の原則によって直示的な値を得た P

がSとして定着してゆく過程として(27)のように表わせる。

$$(26) \quad S \longrightarrow E \longrightarrow P \longrightarrow E \longrightarrow S$$

では、以上のような考え方方に立つと、しばしば時制か否かで意見の分かれる日本語の「一ル」と「一タ」はどうとらえられるだろう。「一ル」と「一タ」が英語の現在・過去と同じくSを持つ時制であるというには、あまりにも非直示的用例が多いように思われる。この二つにはそれぞれP,EとE—Pを対応させ、そのPが文脈や統語的位置（文末など）によってSの機能を得るとするのが妥当であろう。

以上、Pが直示的に変化する現象を考えてきたが、逆にSが発話時という値を失って変数Pとして他の値を取るという場合はどうだろう。(28)と(29)を比較してほしい。

(28) Ich werde meine Arbeit vollendet haben,₁ wenn er kommen₂

(29) I will have₁ finished my work when he comes.₂

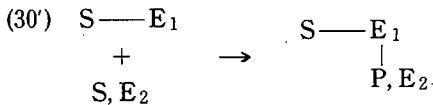
(28)は(29)と時間指示において等しいドイツ語の文である。どちらも二つの文が時の接続詞によって結ばれた形であるが、二つの文の関係は異なっている。(28)では主文と従文のそれぞれが未来の助動詞 werden を持っている。すなわち、この二つの文はたとえ切りはなされても独立に未来指示が保証される。だから、この文の解釈はそれぞれ独立に未来に定位された二つのEをただ結びつけることによってなされると考えられる。この過程を図で示すと下のようになる。

$$(30) \quad \begin{array}{c} S \longrightarrow E_1 \\ + \\ S \longrightarrow E_2 \end{array} \quad \rightarrow \quad \begin{array}{c} S \longrightarrow E_1 \\ | \\ S \longrightarrow E_2 \end{array}$$

このような構造を、独立した時間指示構造と呼ぶことにする。

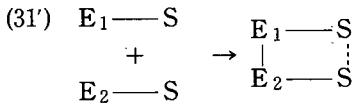
一方、(29)の従文は、切りはなされると未来指示が保証されなくなる。この文の動詞は現在であり、これを直示的に解釈すると、そのEは未来に

定位されている主文のEと結びつくことができない。よって従文の現在時制のSは本来の値を失い、すなわち、Pとなって主文のEに結びつけられる。この過程は次のように表わすことができる。



このような意味構造を従属的な時間指示構造と名づける。このような解釈がなされる条件や、それが適用される統語的構造は各言語によって異なる。英語においては、主文の動詞が未来時制におかれたときに、時の副詞節が時間的従属位置になることができる。主文が過去の場合には、次のように独立構造となる。

- (31) I took₁ her picture when he came.₂



Ultan (1972) の調査によれば、このように未来と過去が非対称的な構造を持つ言語は少なくないようである。¹⁰⁾

時の副詞節の場合、次のような文は非文とされる。

- (32)* He came when I am out.

- (33)* He will come when I was out.

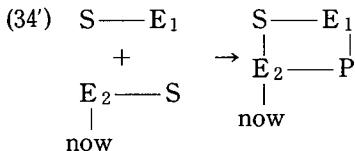
(32)の非文性は、英語においては普遍的と思われる(34)のような規則によっておこると考えられる。

- (34) 現在時制は過去のEに従属することはできない。¹¹⁾

(33)では逆に過去時制が未来のEに従属することができない場合である。これもかなり一般的な規則であろうが、次のような文では過去時制のSが

従属的解釈をうける。

(34) Tomorrow He will know₁ that it was₂ raining now.



この場合 TD now が that 節の過去時制の独立的（直示的）解釈をブロッケンする。

以上、SRE 理論に代る時間指示の記述と分析の方法をさぐりながら、さまざまな言語事象の考察を試みた。もちろん、本稿においてあつかったのは時点間の単純な前後関係でとらえられる部分のみであり、それは時制・アスペクトのほんの一面にすぎない。これらのはんちゅうは、一方で人間の主觀や知覚・認識のあり方と深くかかわっているのだから物理的な時間と照らしあわせてよしとするのは誤っている。しかし、その一面に関していえば、本稿の枠組みによっても一応の見通しが得られたのではないかと思う。

注

1) Reichenbach (1947), p. 297 参照。

2) 同上 p. 294 参照。

3) Hornstein (1977), p. 531 参照。

4) Reichenbach の繼承者である Barense (1980) も、「単純時制しかなかったならば R をたてる必要はない」と述べている。

5) Huddleston (1969), p. 789 参照。

6) 山田小枝 (1984), pp. 60-61 参照。

7) Nerbonne (1983), p. 5 参照。

8) Lyons (1977). *Semantics* vol. 2, pp. 684-686 参照。

- 9) Givón (1982), pp. 116-163 参照。
- 10) Ultan (1978), pp. 95-96 参照。
- 11) たとえば、ラテン語には主文が過去であれ、未来であれ、現在形を要求する接続詞がある。

Allen, R. L. (1966) *The Verb System of Presentday English.*

The Hague.

Barense, D. D. (1980) *Tense Structure and Reference :*

A First Order Non-Modal Analysis. Indiana University.

Givón, T. (1982) "Tense-Aspect-Modality : The Creole

Prototype and Beyond," in *Tense-Aspect : Between*

Semantics and Pragmatics. John Benjamins Publishing Co.

Hornstein, N. (1977) "Towards a Theory of Tense," *Linguistic*

Inquiry 8.

Huddleston, R. (1969) "Some Observations on Tense and Deixis
in English," *Language* 45

Lyons, J. (1977) *Semantics* vol. 2, Cambridge University Press.

Nerbonne, J. A. (1983) *German Temporal Semantics : Three
Dimensional Tense Logic and GPSG Fragment.* Ohio State
University.

Reichenbach, H. (1947) *Elements of Symbolic Logic.* Macmillan.

Ultan, R. (1972) "The Nature of Future Tenses," in

Universals of Human Language vol. 13, ed. by J. H.
Greenberg. Stanford University Press. (1978).

山田小枝 (1984) 「アスペクト論」三修社。